

国文研ニュース

No.56 WINTER 2020



『和漢名物茶入肩衝』

目次

● メッセージ		
日本漢詩文研究の難しさ—柏木如亭を例として	金 文京	1
● エッセイ		
デジタル画像と原本調査と	久保木秀夫	2
書誌学を学んで—「日本古典籍講習会」聴講記—	河田 翔子	4
● 書評		
ブックレット〈書物をひらく〉19 赤澤真理著『御簾の下からこぼれ出る装束 王朝物語絵と女性の空間』	吉井 祥	5
ブックレット〈書物をひらく〉16 寺島恒世著『百人一首に絵はあったか 定家が目指した秀歌撰』	高橋優美穂	6
● トピックス		
第12回日本古典文学学術賞受賞者発表		7
第12回日本古典文学学術賞選考講評	中嶋 隆, 山中 玲子, 阿部 好臣	7
令和元年度「古典の日」講演会	糸 汐里	9
「本のかたち 本のこころ」展観記—どうしてこんな展示ができたんだろう—	村木 敬子	10
マレガ・プロジェクト国際シンポジウム 「マレガ収集日本資料の発見と豊後キリシタン研究の新成果」の開催	大友 一雄	11
地域シンポジウム「神戸の歴史と文化を知る会」	西村慎太郎	11
第43回国際日本文学研究集会 参加記	柏原 康人	12
大型寄託資料の紹介—石川透氏寄託資料と上野学園大学日本音楽史研究所寄託資料と—	神作 研一	13
閲覧室だより	神作 研一	13
総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況		14

日本漢詩文研究の難しさ—柏木如亭を例として

金 文京 (国文学研究資料館運営委員、京都大学名誉教授)

近年、大学の国文学科が日本文学科に改称する例が目立つ。国文学と日本文学はどう違うのか、色々な見方があるだろうが、とりあえず国文学は仮名文学が中心だが、日本文学なら漢文学も堂々と存在を主張できそうである。そのせいかどうか、最近では日本漢学、中でも江戸漢詩文の研究が盛んなようである。手つかずの資料が山ほどあるのだから、研究のやり甲斐もあるだろう。ただし漢詩文である以上、当然ながら中国文学の知識が必要になってくる。日本人の作品とはいえ、模倣の対象、出典はおおむね中国の作品にあるだろう。その探索は本来なかなか難しいはずだが、最近では『四庫全書』や「中国基本古籍庫」など大型データベースのおかげで、コンピュータで簡単に検索できるようになった。日本での用例は、「雕龍日本漢文古籍検索叢書」に限られた範囲ではあるが参考になる。さらに朝鮮の漢詩文については、韓国古典翻訳院の「韓国古典総合DB」が無料で検索できるので、これを併用すれば東アジア的な視点も得られる。以下に一つ実例を挙げてみよう。

江戸後期、日本化した漢詩を作った詩人の代表格として知られる柏木如亭の「吉原詞」其二に、「満面桃花春似海」(満面の桃花、春は海に似たり)という句がある。この「春似海」を前記「日本漢文古籍検索」で調べると、如亭の句を含めて四例を得る。他の三例は、古賀精里の「即是鶯花春似海」(詩題は省略、以下同)、広瀬旭荘「十里黄花春似海」、久保天随「辜負鶯花春似海」で、なぜかみな「～花春似海」となっている。明治以降の久保天随は別として、古賀精里は如亭とほぼ同時代、広瀬旭荘はやや後だから、何か影響関係があったようにも思える。そこで次に『四庫全書』を検索すると、「春似海」は九十例ほどあるが、すべて元代以降の作であることがわかる。より大型の「中国基本古籍庫」、また同じ意味の「春如海」で検索しても結果は変わらない。そこでさらに「花春似海」で検索すると、元末明初の貝瓊に「万樹桃花春似海」、明初の鄭真に「巖谷鶯花春似海」、明代後期の余翔に「酒似桃花春似海」があり、如亭の「桃花春似海」、精里の「鶯花春似海」ともに見ることができる。ついでに「韓国古典総合DB」も検索してみると、十五世紀の詩人、徐居正の「映湖樓上春似海」をはじめ約三十例があり、かつ初期の例は徐居正を含めてみな中国に行ったことのある人物の作で、中国で作った詩もある。「花春似海」は十七世紀の人、李明漢の「岸柳溪花春似海」一例のみである。要するに、中国で十四世紀、元代にはじまる「春似海」という表現が、朝鮮では十五世紀から、日本では十八世紀になって現れる、

かつ日本の例に共通の「～花春似海」は、それ以前に中国にも朝鮮にもあるということになる。

これを単なる偶然と見るか、あるいは何らかの影響関係を考えるか、いずれにせよこの種の事例を集積し分析すれば、従来知られていない事実が明らかになるだろう。問題は中国、韓国の大型データベースがほぼ全範囲を網羅するのに対し、日本にはそれが無いことである。中国、朝鮮ともに数十例が検索されるのに、日本はわずか四例に過ぎないはそのせいで、全体の量からすれば用例はもっとあるだろう。日本漢詩文の今後の研究の発展のためには、正確で網羅的なデータベースの構築が不可欠である。

ところで「春は海の如し」とはどういう意味か。日本の感覚では、ゆったりと広がる春の海というイメージだろう。如亭の知人には村田春海がいたし、蕪村の有名な句も思い合される。東洋文庫版『柏木如亭詩集』の訳が、「あたり一面に春景色が広がっているようだ」とするののもっともである。しかし中国での「春似海」は、むしろ深いという意味であったことが「似海」を検索すればわかる。「春深似海」という言葉もある(清代の小説『児女英雄伝』第二九回)。これは海洋国日本と大陸国中国との感覚の違いであろうか。ともあれ、仮に如亭の詩が「春似海」の日本における嚆矢だとすると、彼はこの表現をどのように得たのであろうか。そしてそれは広い、深い、どちらの意味なのだろう。興味は尽きない。

もうひとつの問題は訓読である。韓愈「雑説」の「食馬者、不知其能千里而食也」は、『古文真宝』の訓点により、古くから「馬を食ふ者、其の能く千里なるを知りて食はざるなり」と読んでおり、現在の高校漢文教科書もそうになっている。しかしこれは「馬を食ふ者、其の能く千里なるを知らずして食ふなり」と読むべきで、結局は同じような意味だが、構文の取り方が間違っている。ただ中国の漢文の場合、誤読なら訂正すればそれですむが、問題は日本人の漢文に付いた訓点である。たとえば如亭『木工集』の高岡秀成序文の冒頭、「余識永日從総角比其弱人多称其善詩」を、東洋文庫版『柏木如亭詩集』は、「比」で切って「余、永日(如亭の字)を総角の比従り識る、それ弱人の多くその善詩を称せらるるは」と読む。同書の凡例によれば底本の訓点にしたがったらしいが、ふつうに読めば「総角」で点を切って、「余、永日を識ること総角よりす、その弱に比びて人多くその詩を善くするを称す」となり、訓点は原意を反映していないと思える。このような場合、訂正すべきか、それとも日本漢文なのだから訓点によって読んでいいのか、専家の意見を聞いてみたいものである。

デジタル画像と原本調査と

久保木 秀夫 (国文学研究資料館資料分析専門部会委員・同共同研究委員会委員、日本大学文理学部国文学科教授)

前々号の小林一彦氏、前号の川平敏文氏に引き続き、若手研究者の方々の参考になるような文献調査の経験談を、というご依頼をいただいた。私は主に中古中世の和歌、及び中古の仮名散文に関する古典籍・古筆切の調査研究を専門としている。それら原本資料の実地調査に赴けば、毎回必ず何らかの発見があり、この上なく面白いので、いつでもどこでもどんな時でも「ああ調査に行きたい」と思っているのがデフォルトである(が、最近はその時間確保も難しく、もどかしい)。よってここでもとりわけ印象深かった調査体験を取り上げて…、のような心づもりを当初はしていた。が、あれこれ考えているうちに、そう言えば数年来、主に書写内容や記載方法などの、いわば内容面を確認する目的で実地調査に赴く機会が減っているな、と気がついた。もちろんその大きな理由は、原本資料のデジタル画像化とそのweb公開が、急激な勢いで進展している点にある。

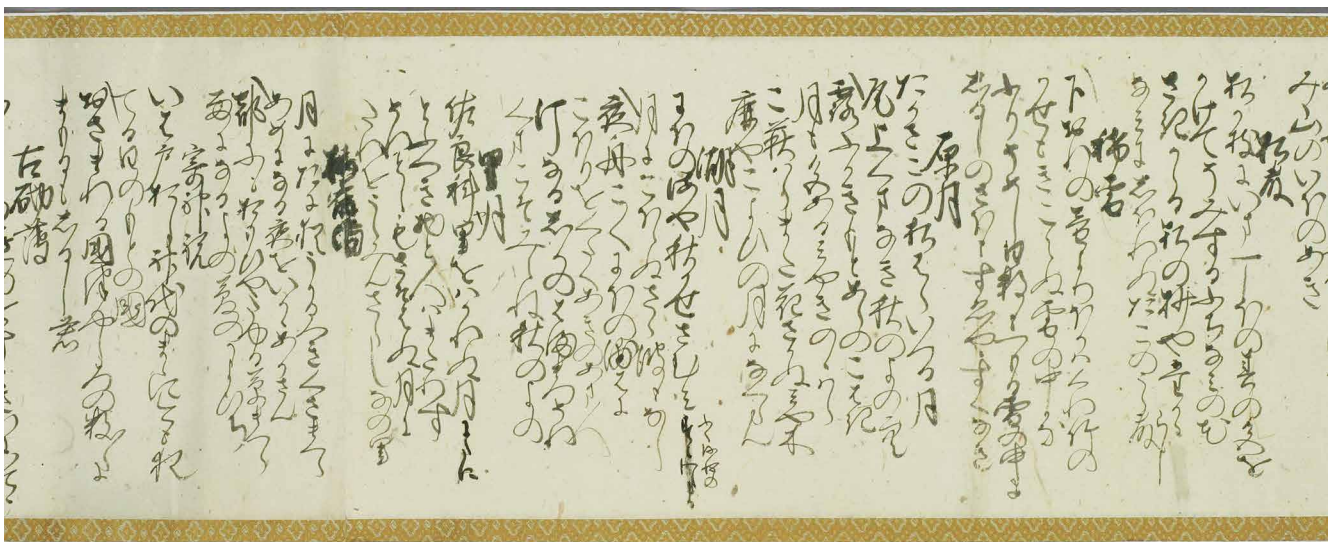
ごく大雑把に、私が原本資料を調べる目的としては、(1) 学界既知の本文や奥書、識語、刊記、書き入れといった書写印刷内容を、原本に基づきながらあらためて確認したいため、(2) 学界既知の古典籍や古筆切の装訂や料紙、寸法、また加除修訂等の痕跡といった形態面を知りたいため、(3) 学界未知の古典文学関連資料を発掘し、その学術的価値を明らかにしたいため、あたりとなる。

うち(1)については、これまでも国文研のマイクロ資料などで相応に確認することが可能であり、その結果、実地調査まで行わずに済む場合も多かった。ただ、それこそ国文研の歴史的典籍NW事業等による原本資料やマイクロ資料のデジタル化が推進されたおかげで、校訂本文や翻刻に不審や疑問を覚えた時や、翻刻もない伝本の本文を確

認したいと思った時に、すぐさまwebで必要部分を閲覧できるのは大変便利、と実感することしきりである。実際ここ1年に限ってみても、どれだけの数の伝本をブラウザで閲覧したか、思い出せないほどである。

ちなみにこうした原本資料のweb公開の先蹤として強く印象に残っているサイトに、奈良女子大学の「阪本龍門文庫 善本 電子画像集」や、早稲田大学の「古典籍総合データベース」などがある。前者については『阪本龍門文庫複製叢刊』『同善本叢刊』に未収録だったいくつもの善本稀本が、一足飛びにweb公開されたことに、当時感嘆と激賞の声が巻き起こったことを記憶している。後者についても、出し惜しみなど全くしない素晴らしいスタンスに加え、シンプルにして過不足のないその設計は、現在なお最も使いやすく理想的、と個人的には考えている。先般も、同大蔵の『三条西実連詠草』(へ02_04867)の所収歌中に、正親町三条実継の『永徳百首』詠1首が紛れ込んでいることに気がつき(『語文』158(2017.6)拙論参照)、該当部分のデジタル画像(図版1の5~6行目「さきかゝる」詠=『新編私家集大成』「実連Ⅱ」45に該当)を確認することなどがあった。ほかにも詳細は省略するが、「国立公文書館デジタルアーカイブ」では『八雲御抄』内閣文庫本(202-0001)を、「京都大学貴重資料デジタルアーカイブ」では『後撰集』中院文庫本(中院/VI/78)を、またその他諸々のサイトで諸々の原本資料のデジタル画像を確認し続けてきている。

ただし、ではデジタル画像だけですべてが解決するかと言えば、決してそうとは限らない。例えば上述『三条西実連詠草』に関しては、別種のもう1点(へ02_04867_0012、『新編私家集大成』「実連Ⅰ」底本)と併せて、既知の校訂本文



図版1 早稲田大学図書館蔵『三条西実連詠草』

などからではとても察せられないほどに、書写の在り方が錯綜していることに気づかされた。かつ、それらの本文上の連続・不連続や加除修訂など、精細なデジタル画像によってもなお、画面越しというばかりでは解決に近づけないように思われた。

ひとつには、まさにそうした時にこそ、原本そのものの実地調査が必須となってくるわけである。上述の早大本2点については、いまだ実見には及んでいないが、ともあれこうした、既存の影印本や複製本の不足を補うこと大であるデジタル画像のWeb公開の普及によって、書写印刷の様態をみるだけで済むか、そうではなく、みた上でやはり実地調査が不可欠か、といった判断を非常に下しやすくなった。調査研究に充てられる時間には現実的に限りがあるため、環境の改善がこのように為されていくのは本当にありがたい。

あるいは先に(2)とした原本資料の形態面に関しても、例えば龍門文庫本のとある1点には、いくつかの文献資料から必ずや、そのうちのとある1丁に、とある書誌的な特徴があるはずだ(曖昧な言い方で恐縮)、と予測したことがまずあった。かつ、ちょうどその1点がweb公開されていたので、喜び勇んで該当部分の画像を確認してみた。のであるが、それらしきものがあるような、しかしちょっと違うかもしれないような微妙なところで、デジタル画像だけに基づく判断は無理そうであり、実地調査以外に解決の手立てはないものと判断された。また詳細はもう省略するが、宮内庁書陵部図書寮文庫蔵の『弁乳母集』(553-17)や『橋為仲朝臣集』(150-568)に関して、本文上の不審点から、列帖装の料紙の錯乱があるのでは?と考えることなどがあった。これも国文研のマイクロ資料に基づくデジタル画像だけでは同様に、検討するにも限界があったため、実地調査に及んだのだった(ただしいずれも残念ながら、きれいに解決するような結果は得られなかった。そう簡単には思うようには進まない)。

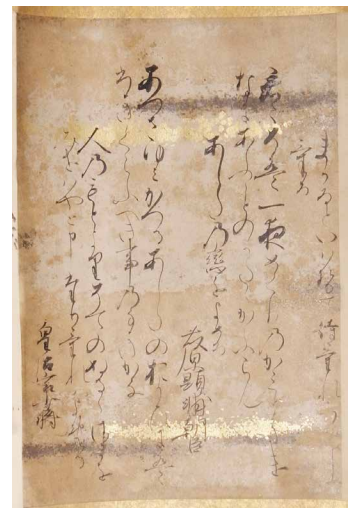
前述(1)(2)については以上のようなようだが、それに加えて何と言っても、俄然(自分の中で)盛り上がるのは、(3)新出資料の発掘、である。もっとも、古い時代であればあるほど、古典文学作品そのものにしても関連する諸資料にしても、さすがにもうほとんど紹介され尽くしているのでは?と思われる向きがあるかもしれない。が、そんなことは全くなくて、単に探されていないだけである。例えばかつて、藤原為家男の歌僧、源承撰の散佚私撰集『類聚歌苑』巻十三の残欠本を、天理大学附属天理図書館の貴重書中から見出したことがあったが(拙著『中古中世散佚歌集研究』〈2009青簡舎〉参照)、これはふとしたきっかけで、念のため程度に国文研の日本古典籍総合目録DBで検索してみたら、何と「天理(慶応三横山由清写)」と示されたので

でも驚き、慌てて『天理図書館稀書目録』にあたったところ、早く1951.10に公刊されていた『和漢書之部 第二』に、確かに記載されていたのだった。

ついでに一言しておく、これまでに私が最も多く訪れているご所蔵先は、おそらくこの天理図書館ではないかと思われるほどであり(最低でも年に一度は必ず)、関心が広がったり新たな調査対象が加わったりするたびに、『稀書目録』を通覧し、かつ同館OPACを検索するのがもはや習性となっている。そして毎回期待に違わずに、おおこれは、という原本資料が必ず複数見つかるのである。その底知れなさには、ただただ畏敬の念を抱くしかない。

ちなみにこの『天理図書館稀書目録』のみならず、総じて各ご所蔵先の蔵書目録類は定期的に通覧し直していくのがよくて、当初見逃していても何年かごとに繰り返し読んでいくうちに、こんな原本資料があったのか、と気づかされる場合が本当に多い。原本資料に関する情報を自身で次々蓄積していくことにより、蔵書目録類から引き出し得る情報量も、自ずと増加していくのであろう。

もうひとつ。紙媒体の蔵書目録以外で近年、各ご所蔵先のHPでも、それぞれに所蔵されている原本資料の検索ができるようになってきている。これも大変ありがたいことで、例えば先般も、オーテピア高知図書館HPの「収藏品検索」サイトを活用した結果、伝藤原為家筆『金葉集』落切という古筆切の名物9面分を新たに発掘することができた(図版2)。いずれきちんと紹介したいが、ともあれその気になりさえすれば、すでに一般公開されている情報を効果的に最大限に活用していくことにより、秘庫秘蔵の古典籍類に接するようなことがなくても、誰もがこうした新出資料を発掘できる可能性があるはずだ、ということは繰り返し述べておきたい。しかもそうした環境は、かつては想像もできなかったほどに整っている。となればあとは(いささか偉そうな言いながら)それらを探そうとし、かつ発掘し調査し研究して公表する若手研究者の方々が、これからもなお、どれだけ現れてくれるのか、増えていくのか、といったところにかかってこよう。断絶せずに現れてくれること、増えていくことを切望している。



図版2 高知市立市民図書館蔵 加賀野井家資料『金葉集』落切

書誌学を学んで —「日本古典籍講習会」聴講記—

河田 翔子（鶴見大学大学院文学研究科日本文学専攻博士後期課程）

令和元年7月2日～3日に国文学研究資料館で開催された「第2回若手研究者のための古典籍講習会」を聴講させていただきました。今回はその体験をもとに、参加した感想などを書かせていただきます。

この講習会は、日本の古典籍を所蔵する機関の職員（古典籍業務担当の経験年数が概ね3年以内の方）を対象に、年1回、同館と国立国会図書館が共同で開催されている「日本古典籍講習会」（第17回目の今回は7月2日～5日開催）の前半2日間にあたるものです。昨年度からは大学院生や若手研究者を対象に、《日本古典籍書誌学の初歩的知識についての修得を目的として》聴講生が募集されています。昨年参加した知人から、「この講習会を通して、書誌学の基礎について分かり易く学べる」と聞き、今回参加を希望いたしました。

講義では、はじめに総論として、^{あまのこ}神作研一先生から「古典籍」「書誌学」の定義、書誌用語解説、古典籍の書誌記述の方法などのお話を伺いました。印象的だったのは、「データベース」と紙目録の違いについて、「データベースは探しているものしか探せない」というご説明でした。スマートフォンやノートパソコンの普及した現代では、つい何かあるとデータベース検索を使ってしまいがちです。ですが、先生の仰るように、検索をするとその時探している情報しか得ることが出来ません。対して、紙の目録をめくっていると、「こんな本もあるのか」「この本は何だろう？」と、今まで知りもしなかった情報（本の存在）を知り得ることが出来ます。そういった、新しい情報・新しい本との出会いが書誌目録にはあり、まさにそれこそが書誌目録を作り使う意義なのだと感じました。また、書誌目録には「棒目録」と「解題目録」の二種類があり、それぞれの長所・短所を把握した上で「美しい目録を目指す」と表現されていたことも大変印象的でした。情報を長々と記すのではなく、本当に必要な情報のみが「凝縮」して書かれている、そのよ

うな「美しい」書誌目録こそを目指すべきなのだと実感しました。

総論が終わると各論に入り、「くずし字」「写本（奥書・識語）」「版木（刊記・奥付）」「蔵書印」「絵入り本」「装訂・料紙」「表紙の文様」「江戸／幕末の出版文化」等について、各分野の先生方のご講義がありました。古典籍について改めて種々様々な側面から学ぶことが出来るのは非常に貴重な経験でした。古典籍を見る際に特に注目すべきポイントを先生方が分かりやすく解説して下さり、さらに実際にくずし字を読んでみる等の練習問題にも挑戦させていただきました。自分達で実際に手を動かし、教わったポイントに注目することで、少しずつ「古典籍のどこを見れば良いのか？」ということが分かってきたように感じました。

今回の講習会を通じた学びの特徴は、実際の古典籍を目の前にしながら先生方の解説を伺うことが出来た点です。実物を実見することで、写真やお話だけでは理解しきれなかった細かな部分を知り得ることが出来ます。例えば絵入り本等は、実物を目にすることでではじめてその手触りや重量感、絵の細部や色の美質さらには時を経た本が醸す匂いといったものを感じることができ、写本や刊本はそれぞれの本の書型や装訂の違いを目で見て確認して映像として記憶することができました。他の受講者の皆さんも古典籍の実物を目の前に食い入るように見ておられ、講義で伺ったお話を実物を通して再確認しておられる様子でした。基礎知識を身につけた上で実物をよく見ることの大切さを、今更ながら実感いたしました。

このような貴重な経験・ご講義をしてくださった各先生方、ならびに国文学研究資料館の皆様深くお礼を申し上げます。ありがとうございます。



ブックレット 〈書物をひらく〉 19

赤澤真理著『御簾の下からこぼれ出る装束 王朝物語絵と女性の空間』

吉井 祥 (お茶の水女子大学リサーチフェロー)

王朝物語絵を見たことのある人ならば、御簾の下からこぼれ出た女性の装束の美しさを覚えていることであろう。本書は、こうした邸宅の外周に装束を打ち出だすこと、「打出」(中世では置物)を対象に、装束を用いた女性たちの晴れの場における空間演出について、わかりやすく解説してくれる。

著者である赤澤真理氏は、建築史が専門である。氏の研究の特徴は、建築史において従来は補足史的扱いを受けていた物語絵を対象として、文献史学、美術史学の知見を用いながら、住宅空間を明らかにするところにある。その研究成果により、我々は、古典文学をより立体的に捉えることができる。近年では、第19回国際日本学シンポジウム(於

お茶の水女子大学)や、平成30年度和歌文学会十二月例会(於 立教大学)における、源氏絵に描かれた居住空間の変遷や、歌合の場についてのご発表が記憶に新しい。本書もまた、「打出」に着目することで、女性の空間演出という興味深い視座を与えてくれる。

本書は五章で構成される。「一 打出とは何か」では、まず言葉の定義と打出の説明がなされる。そして、御簾の下から出された装束には、大きく三種類「①女房が着用した装束を出している」「②打出を設置して、後ろに女房が座る」「③打出を設置して、後ろに女房が座らない」があると述べる。「二 打出の舞台」では、古代・中世における住空間について説明し、空間の境目から装束がこぼれ出ることが女房たちの密集を暗示することを指摘する。「三 寝殿造の空間」では、平安時代の寝殿造について、「開放的なひとつの空間であった」ことを説明する。「四 打出の心」では、女房たちが密集して座るときに、外との境界からこぼれ出る装束が、どのように人不在の置物「打出」となったかを解説する。その背景に、華美への禁制逃れがあったというのは、面白い。「五 打出の演出の展開」では、「平安時代後期までは、御簾の外に装束の袖口をのぞかせていたものが、院政期にかけて華やかになり、人が不在の室内装飾へと転じ、室町時代後期にかけて姿を消していった」という、打出の史的展開を述べる。その要因には、襖障子や杉戸の発達といった建築空間の変容と、女性の公的な地位の消失により、儀式空間に女性の座が失われたことがあるという。全体に、図表や写真を多く掲載してくれているので、筆者のような専門外の読者にもわかりやすい。特に第一章の「駒競行幸絵巻」や「年中行事絵巻」を用いた「打出」の説明は、内容に引き込まれた。

一方で、第二章で、寝殿の北対について天野(水田)ひろみ氏の「北面や北対は物語上で目立たず、表舞台から去ってゆく人物が使用した」という指摘を示した上で、続けて「『源氏物語』の時代の宮中であった一条院では、皇后定子は北対に居住している。藤原道長と藤原伊周の政権争いで、伊周は敗れ、伊周の妹である定子も排斥されてゆくのである」と記述することは、北対が劣った場所であり、だから定子もそこに住まわされたのだという見解に受け取れてしまう。一条天皇は内裏焼失により一条院の北対を清涼殿とした。定子の居住は一条院内裏の北二対、彰子の居住は東北対であった(山本利達「一条院の結構」『紫式部日記攷』清文堂出版、1992年/初出1979年3月参考)。里内裏と貴族一般の邸宅(および物語上の設定)とは異なるであろう。里内裏では内裏をまねて后妃の居住を北側に設けたとは解せないか。建築という著者の専門と、史実、物語の交差する興味深い部分であるため、丁寧な説明がほしかった。また、第四章では、「人が不在の調度としての「打出」は、藤原頼通の時代、『栄花物語 続編』に登場し、院政期に隆盛を極めていった」とあるのだが、この「人が不在か否か」の判断の根拠はどのように付けられるのか、つまり「打出」という語の用例について、それが「出衣」か人不在の置物かという判断は、どのような基準でされるのか、明示してもらえると、古典文学の読解に、より有益となったであろう。たとえば『栄花物語 根合巻』には、「女房どもの髪上げてみな打出でたるに」とあり、これは「出衣」であろう。著者自体、『栄花物語 続編』、『讃岐典侍日記』までは、「実際に女房が着用している話」が書かれている、「『栄花物語』の「打出したり」とする記事や、堀河天皇の打出も、実際に着用した装束を出しているように思われる」と記載している。「打出」の歴史的展開に関わる本書の肝ともなる所だと思われるため、より詳しい説明がほしかった。

以上、要望も述べたが、女性が作り出した空間美という興味深い知見をもたらしてくれる良書である。



ブックレット〈書物をひらく〉16

寺島恒世著『百人一首に絵はあったか 定家が目指した秀歌撰』

高橋 優美穂（日本大学非常勤講師）

『百人一首』は、今日では藤原定家による秀歌撰であると理解されている。この作品の成立に関する研究が活発になったのは昭和26年に有吉保氏によって『百人秀歌』が発見されてからだろう。この発見によって、定家の日記『明月記』の中の「予、本より文字を書くことを知らず。嵯峨中院の障子の色紙形、故さらに予書くべき由、彼の入道懇切なり。極めて見苦しき事と雖も、愁いに筆を染め、之を送る。」という記事は『百人一首』のことなのか、『百人秀歌』なのかという問題が浮上した。それ以来、『百人秀歌』と『百人一首』の関係は60年以上にわたって様々な研究者たちが挑み続けてきたが、残念なことに真相の解明には至っていない。

本書は、『後鳥羽院和歌論』（笠間書院、2015年刊）に代表される、寺島氏が長年積み重ねてこられた後鳥羽院研究の成果を踏まえて、『百人一首』と絵画資料との関わりから、作品の性格を明らかにすることを目的とした一冊である。

本書は5章から成る。「一 『百人一首』の成立」では、『百人一首』の成立に関する研究史に言及する。60年以上も続く『百人一首』の研究史が、コンパクトに、かつ明快にまとめられている。

続く「二 催しの先例——『最勝四天王院障子和歌』との関わり」では、『百人一首』と『百人秀歌』の配列の違いを考察する。『最勝四天王院障子和歌』とは、三条白川にあった、後鳥羽院の御願寺である最勝四天王院の御所内部を飾る名所障子絵に添えられるのを目的にした和歌である。この和歌は、定家や家隆をはじめとする、歌人十名によるものである。その『最勝四天王院障子和歌』の絵画と和歌の配置を踏まえて、定家の『明月記』に見える「嵯峨中院」の障子に貼られた色紙形を復元すると、それらは、一つの大きな広間に貼られたものではなく、「複数の間に設えられていたと見るべき」と指摘する。

「三 作品の先例——『時代不同歌合』との関わり」では、承久の乱に敗れ、隠岐に配流された後鳥羽院が撰んだ歌合である『時代不同歌合』を定家が知っていた可能性が高いことから、それに対抗するかたちで撰ばれたのが「嵯峨中院」の障子歌であったと寺島氏は考察する。しかも、『時代不同歌合』には歌仙絵が描かれた伝本があり、本来は歌仙絵が不可欠な作品であったことも指摘する。さらに、その絵巻の成立過程の中で、似絵の名手である信実の関与が語られていることをふまえると、『時代不同歌合』は和歌テキ

ストのみの成立であったと考えるのは困難であると考察する。以上のように、『百人一首』あるいは『百人秀歌』が成立するにあたり、催しとしての先例と、作品としての先例の2作品があることを指摘する。そして、「四 『百人秀歌』の配列」では、『百人一首』と『百人秀歌』に一致する歌を比較し、『百人秀歌』の歌は、時代順に全体を5つのまとまりに区分でき、それは『百人秀歌』が嵯峨中院の複数の部屋に貼られていたことに起因すると述べる。

最後の「五 『百人秀歌』の試み」では、これまでの論を踏まえて、定家が『百人秀歌』で試みた事項を考察する。すなわち、『百人秀歌』は歌仙歌合形式による配置が重視された障子歌であり、その形式は『時代不同歌合』への共鳴と対抗意識に由来するというものである。また、障子歌であるため、当初は色紙形に書かれた歌と、向き合う歌仙像が描かれていたであろうことも指摘している。ただし、寺島氏がこの章で述べるように、『百人一首』と『百人秀歌』のいずれが先の成立であるのか、明確な答えを出すことはできず、「成立の違いに基づく両作の性格の差異」を議論に組み込む必要がある。

成立に関する明確な結論が出なかったとはいえ、本書は様々な研究者たちが提示してきた説を補強し得る、重要な指摘にあふれている。近年本書が取り扱ったことを正面から論ずる研究者は現れていない。それは、『百人一首』の成立過程に関する根拠資料が不足していたことが原因であり、研究者たちはそのことで、あまりに慎重な姿勢を取り過ぎていたからではないだろうか。だが、寺島氏が「あとがき」で述べるように、研究は「誤解と恣意とをあくまで避けて、わずかなりとも手がかりが見いだせたならば、それに基づき、究明への道を進むべき」である。本書には、新出資料こそないが、これまでに知られていた作品の中にある「わずかな手がかり」から「究明の道」へと進んだ好例なのではないか。



第12回日本古典文学学術賞受賞者発表

「日本古典文学学術賞」は、財団法人日本古典文学会が主催していた「日本古典文学会賞」を継承し、若手日本古典文学研究者の奨励と援助を目的として、国文学研究資料館賛助会に設置されました。令和元年で第12回を迎えます。

受賞対象者は、対象となる業績の公表時に40歳未満である研究者です（3名以内）。

今回は九州産業大学国際文化学部准教授の天野聡一氏、名古屋大学大学院人文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センター研究員の猪瀬千尋氏、奈良大学文学部講師の松本大氏の3名が受賞され、授賞式は10月18日（金）に国文学研究資料館館長室で執り行われました。

◆選考委員◆

田中 大士（上代文学会／日本女子大学教授）
阿部 好臣（中古文学会／日本大学教授）
中嶋 隆（日本近世文学会／早稲田大学教授）
山中 玲子（中世文学会／法政大学能楽研究所所長・教授）
渡邊 裕美子（和歌文学会／立正大学文学部教授）
山下 則子（国文学研究資料館賛助会運営委員会委員長・同館副館長）
入口 敦志（国文学研究資料館教授）



後列左から
山下副館長、渡邊委員、阿部委員、山中委員、入口委員
キャンベル館長、天野氏、猪瀬氏、松本氏

第12回日本古典文学学術賞選考講評

天野聡一氏『近世和文小説の研究』

（笠間書院、2018年12月刊）

著者は、本書「序論」一・二章で「和文小説」の概念とその通時的展開を明確に陳述する。特に、所謂初期読本と近世擬古文を「和文小説」というジャンルに括って通時的に考証した点、馬琴・京伝と南畝との対立軸のなかで、雅俗と文体の問題を鳥瞰した点に説得力があった。「序論」で述べられた斬新な視座が、以下の各論で生かされている。

「第一部 懐徳堂の和文小説」で、成果の第一に挙げられるのは、『続落久保物語』の作者が五井蘭洲で宝暦七年以降の成立と推定したことである。一方、同書の内容について論じた第二章では、蘭洲の物語注釈と創作との密接な関係を指摘し、「不遇の反転」というこの作品の仕掛けを読み取るべきだというユニークな論を展開した。加藤景範『いつのよがたり』を論じた第三・四章では、『いつのよがたり』と桜町天皇との関係を指摘したのは新見で、妥当な考証と言えよう。

「第二部 江戸派の和文小説」では、第一章で服部高保『てづくり物語』を考証し、第二・三・四章では、これまでほとんど論じられなかった掌編小説、村田春海「春の山ぶみ」、清水浜臣「虫めづる詞」、朝田由豆伎『袖のみかさ』について、それぞれ考察する。『てづくり物語』は、明和二年から安永九年の間に執筆され、『竹取物語』・生田川伝説・六玉川の三要素から構成される。これらは高保の万葉集研究によって導き出されたという結論は妥当な論旨展開である。特に「第四章 朝田由豆伎『袖のみかさ』考」は 実践女子大学黒川文庫蔵孤本の本格的考察である。本書が由豆伎の自筆本であることを確定し、『袖のみかさ』の三人の女官は史実の女官と一致することを考証した点は、高く評価できる。

「第三部 読本における和文小説とその周辺」は、第一章で、石川雅望『飛驒匠物語』を論ずる。『飛驒匠物語』を神仙譚、山人・女一宮の恋愛譚、山人・むらさきの恋愛譚の組み合わせとして把握し、構成や「ひたえのひさご」描写、『源氏物語』の利用、さらに古本『更級日記』の発見という雅望の誤断にまで論が及んだ力作である。第二・三・四章は、

芍薬亭長根の読本『濡衣双紙』『国字鶴物語』について論ずる。これらの章の論旨展開は、南畝の読本観と、『燕石雑誌』で述べられた馬琴の雅文小説批判とが明確な座標軸となって、文体分析を越えた可能性を感じさせる。

本書がユニークな点は、従来「読本」等の枠組みで捉えられていた「和文小説」を、独自のジャンルとして再把握したことである。従来等閑視されていた懐徳堂の和学者の小説や、江戸派の掌編和文小説を研究対象にした意義は大きい。また、南畝の読本観から、馬琴の見識と比較しつつ長根の読本を論じた点も評価できる。一方では、和文のもつ特性について、もう一つ踏み込んだ考察が欲しいところである。たとえば、著者が簡単に触れた「和文の伝達性」という観点は文化史的な広がりを持つだろう。著者は、秋成について触れていないが、今後、「和文小説」という観点から秋成が論ぜられることを期待したい。

本書は選考委員会で高い評価を得、全員一致で天野聡氏を日本古典文学学術賞の受賞者に決定した。

(文責 中嶋 隆)

猪瀬千尋氏『中世王権の音楽と儀礼』

(笠間書院、2018年3月刊)

本書は、日本中世の王権の中で音楽が果たした役割を図像や楽器等を含む膨大な資料の分析と注釈に基づいて明らかにし、文学・歴史・思想が連関する音楽の文化的動態を多面的に解明しようとした意欲作である。

第一部「歴史と権力」は、中世の宮廷における音楽儀礼の考察を、音楽における権力性の問題へと繋げていく。琵琶「玄上」を起源とする累代楽器の展開と、天皇・院・摂関家などの権力との関係、十四世紀以降に史料に現れる「御楽」の実体と展開、内侍所御神楽の変遷等々を、多くの史料の検討と緻密な読解によって明らかにしたうえで、こうした音楽儀礼の展開の中に常にある後醍醐天皇との関連を検証し、説得力のある成果を上げている。

第二部「空間と身体」では、琵琶の秘曲伝授について多方面から詳細な分析を行う。最奥の口伝が南北朝の動乱期に外部へ流出していった事情を解明するために、氏は、根本資料となる『啄木調小巻物』(宮内庁書陵部蔵)に記された九種の奥書識語を徹底的に吟味し、同書の伝来を明らかにする。秘曲伝授の儀礼空間や次第の復元を試みる複数の章では、伝授の場となった西園寺北山第妙音堂や本尊である妙音天(弁財天)について、歴史的・美術的・宗教的側面から視野の広い考察を進めるが、そのような場合でも議論は常に、膨大な資料の発掘と解説を踏まえた堅実なものとなっている。

第三部「言葉と宗教」は儀礼における唱導を考察の対象とし、「王権を支える論理としての音楽の宗教性」を明らかにしようとする。中世における狂言綺語観の展開、音楽儀礼における狂言綺語観を、願文・表白・講式等の分析を通して検証し、中世の狂言綺語観の一展開である「宿執」が、「道」や「家」など中世の他の理念とも関わるとい興味深い指摘もおこなっている。

音楽の特質を「権力性」「身体性」「宗教性」という三つの視点でとらえようとする猪瀬氏の発想は、斬新で魅力的である。ただし、それぞれを本書の第一部、第二部、第三部に対応させようというもくろみは、必ずしも成功していない部分もあるのではないだろうか。個々の論文の豊かな成果が、三つの言葉にまとめることでかえってわかりにくくなっている例もあるように思われた。とはいえ、氏がこの三つの視点の設定によってめざした、日本中世の歴史・思想・文芸等と深く関わる音楽の意義についての解明は十分に成され、同時に、氏独自の研究スタイルが確立していることも、資料を扱う高い能力も、明らかである。近代以降の音楽史研究と関連分野を広く見渡し、自らの問題意識を位置づける「序章」の手際も優れていた。

以上の諸点によって、本書は選考委員会で高い評価を得、全員一致で猪瀬千尋氏を日本古典文学学術賞の受賞者に決定した。

(文責 山中 玲子)

松本大氏『源氏物語古注釈書の研究 『河海抄』を中心とした中世源氏学の諸相』

(和泉書院、2018年2月刊)

松本大氏著『源氏物語古注釈書の研究 『河海抄』を中心とした中世源氏学の諸相』(和泉書院、2018年2月)本文392頁、索引17頁

本書は三部構成で、第一部は『河海抄』諸本系統論、第二部は、『河海抄』の注釈姿勢と施注方法、第三部が『河海抄』以後の諸注釈書、からなる。

『河海抄』は、本居宣長が「注釈は河海抄ぞ第一の物なる」(『玉の小櫛』)と称賛されたもので、出展考証は徹底を極め、詳細な故事や和歌の指摘、背景となる歴史事実によって作品を読み解く準拠論の主張など、今日の研究状況

などにとっても重要な視座を提示し続けているものである。いわば、この注釈書は単に一注釈という域を超えて、作品の土台を提示する巨岩といえるものでもあり、ある文化そのものの集積ともいえるのだろう。ただ、注釈という行為はどうあり、どう伝えられるものか、その根底には、注釈書それ自体の伝本状況などが持つ問題に端を発する複雑な状況が潜んでいる。『河海抄』は、その伝本を「中書本系」（ある段階までに成立したもの）と、それに更に手を加えた「覆勘本系」に分けて考えられて来た。ただしこれは伝本の奥書から考察された物でしかなく、著者は、内容そのものの具体的な調査吟味の中から、その通説は当てはまらないことを検証し、新たな伝本論を構築してみせる。これが第一部。確かに、そのような丹念な吟味こそが本来なされるべきものであったが、通常・奥書を重視する伝本研究に大きな一石を投じたのであった。一伝本の一つ一つを丹念に読解、比較検討する行為は、最も基本的で重要なのは誰しもが分かっていることであろうが、それを地道に確実に追及することは、誰しもが出来るものではないだろう。なおかつ、『源氏物語』という長大な作品に関する事で、その作品そのものにも、書写一筆の伝本は稀有で、問題とされるところだが、その問題は注釈の世界にも無縁ではない。著者は、巻それぞれの含む問題をも視野に可能などころから、しっかりと注記それ自体を丹念に比較検討する。これこそが、なされるべき手続きであった。

それを、更に先行の『紫明抄』を軸にその引用の実態に迫り、中世源氏学に広めて注記の実態にそくして吟味すら。そして、『源中最秘抄』を始めそれぞれの問題点を掘り起こして、新たなエリアを切り開く。

なお、飯尾宗祇に『河海抄抄出』の著作があることが知られこれは、実は『花鳥余情』と『河海抄』との抄出を内容とするもので、注釈書がどのように利用されたかを示す好材料なのではあるが、と同時に注釈とその伝授に関わる重要な問題をも提起していると考えられる。そのような世界への見渡しも今後提示され開かれて行くであろう。本書は中世源氏学という重要な研究領域への切込みとして大きな一石を構築したものと判断出来、本賞の該当研究として長くその地歩を示したと評価された。今後の益々のご研鑽を祈念して、講評としたい。（文責 阿部 好臣）

令和元年度「古典の日」講演会

令和元年11月2日（土）、国文学研究資料館において「古典の日」講演会が行われました。「古典の日」は、『源氏物語』の文献上の初出とされる寛弘5年（1008年）11月1日（『紫式部日記』より）にちなみ、平成24年に11月1日と定められました。今年度は谷川恵一氏（国文学研究資料館副館長）と小嶋菜温子氏（立正大学教授・立教大学名誉教授）を講師にお迎えし、約100名のご来場者とともに貴重なお話をうかがいました。

ロバート キャンベル館長の挨拶に始まり、まずは谷川氏より、「古典発掘—文学の近代と古典文学—」という題で

お話がありました。戦時中の絶対主義的な文学思想が揺らいだ戦後の日本では、新しい古典の解釈とは何かという議論が作家たちの間でなされていました。上田秋成『雨月物語』を愛読した関根弘、佐藤春雄、円地文子、三島由紀夫らによる作品評価や、石川淳による創作ととれる古典の口語訳は、今日の近代文学研究において未開拓の領域です。その魅力と可能性について、主に石川淳の『雨月物語』の口語訳の過程を説明しながら語っていただきました。

次いで、小嶋氏より、「幻の「源氏物語絵巻」をもとめて」という題でご講演いただきました。物語の全本文が記されるため、かなりの巻数が制作されたと考えられている「幻の源氏物語絵巻」。今年の1月にフランスで発見された夕顔巻残欠本のほか、国内外の機関で調査された他の巻についても、高精細な画像を示して解説され、最新の研究成果をお話していただきました。美しい絵巻の余韻に浸りながら、今年度も盛況のうちに閉会しました。（糸 汐里）



谷川恵一 副館長



小嶋菜温子 教授

「本のかたち 本のこころ」展観記—どうしてこんな展示ができたんだろう—

数十年振りの記録的な豪雨により内覧会が中止されるという波乱含みの幕開けに彩られた本展示。お預けのおやつに飛びつく犬よろしく、うらかな秋日和の一日、勇んで立川に出かけました。くずし字や古語に馴染のない人々に本の魅力を伝え（しかも多くは見開き一丁で）、同時に一步踏み込んだ知識を得たい人の欲求をも満たす、という古典籍の展示における永遠の課題が古典研究のプロ集団によりどのようにクリアされているか。国文学研究資料館の展示の見どころの一つはそこでしょう。

さて、晩秋の陽光に射られた眼が展示室の暗がり慣れにつれ、ぶち抜きにされ最大限に広がった室内にところ狭しと並べられた本たちに圧倒されますが、とりあえず順路に沿って見学。入口で入手できる懇切丁寧な図録に示されるごとく、本展示はおもに6つの切り口、すなわち「本の製作と読書の記録」「多様な表記」「稀少な本」「絵入り本—文章と絵と—」「著名な本」「本を記録する—書籍目録—」によって見せる工夫がなされています。そしてそこには「日本古典籍における表記情報学の発展的研究」「歌書を中心とした江戸時代の絵本と絵入本に関する基礎的研究」「<判官物>の語り物の基礎的研究—幸若舞曲・説経・古浄瑠璃の影響関係の究明」という三つの科研の研究結果が盛り込まれているとのこと。

このうち筆者が面白く拝見したブロックの一つが、本を型で見せる「表記」のコーナーでした。和文の版本に導入された匡郭、漢字カタカナ交じりとひらがな交じりの混用などに、成立に関わった人々の属する文化圏や美意識を考えさせられ、守清本「謡抄」等を思い出しながら興味深く見入りました。また歴史上の出来事や鍼灸のツボを七五調で記憶する「寅の巻」の存在には心慰められました。

なんととっても見て楽しいのは絵入り本の数々でしょう。いつの間にこんなに国文研に集ったのか、奈良絵本や絵巻、扇面画、断簡等さまざまなかたちの絵入り本が紹介されています。古浄瑠璃など語り物が素朴な絵本に仕立てられたものも愛らしいですが、筆者は特に絵巻の断簡が不思議な順番に貼りこまれた大型の『雀の夕顔絵巻貼付屏風』に惹かれました。この順番にはなにか意図があるのか…。それはともかく繊細な筆遣い、情感あふれる自然や人物表現に見どころがあります。近寄ってもっと見たい、という隔靴搔痒感は、展示の最後のデジタル画像コーナーで解消される仕組み。写本に続いては嵯峨本『伊勢物語』、珍しい絵活字が必見の『曾我物語』など、絵入り版本の優品が並び、さらには「和歌絵本」という新しく提唱されたジャンルに属する美しい色摺りの歌仙絵が展示されます。「古活字と整版」「初印本と後印流布本」といった書誌学の基本も実証的に押さえられています。

噛み応えのあるのが「稀少な本」「著名な書」というシンプルなタイトルのコーナー。前者には「一本書」という重たい名称を帯び秘伝として残された密教書や能の伝書、故実書など平安時代写本を含む珍しい書物たち、後者には信仰、法律、自然科学の実用書等、いずれも文学史に登場する文芸書の範疇とは若干異なるものが数多く並べられていました。

「書籍目録」の一群は、寺院の聖教、名家の蔵書、分野別目録等、歴史上重要な寺院や人の思想を読み解く手がかりとなるもの。近年、美術館界でも大コレクターの蒐集品の復元に焦点を絞った展示が目を集め、所蔵家のコレクションの意味を問い直す動きがでています。国文研のこのたびの展示も購入した古典籍に加え、旧家やコレクターのご寄贈品の数々から成り立っていること、図録末尾の出品リストに明らかです。これは資料を適切に研究や普及活動に供する施設という信頼を同館が得てきている証しといえましょう。書籍目録の展示は、国内外の典籍の調査・収集を活動の根幹に据え「日本古典籍総合目録データベース」を日夜増補し続ける国文研を象徴するようにも思われました。

文学という仕分けが生まれる前の、知識や思想がごたごたになった豊穡な「本」たち。悉皆調査で国文研が出会ってきた本の堆積はまさにそういうもので、「どうしてこんなにいろんな本ができたんだろう」という本展示のサブタイトルは、そのままスタッフの日常のつぶやきにも聞こえます。国文学を超える国文研。この展示の秘めた底力を感じながら展示室を後にしました。

(大東急記念文庫学芸課長 村木 敬子)



マレガ・プロジェクト国際シンポジウム 「マレガ収集日本資料の発見と豊後キリシタン研究の新成果」の開催

2019年10月26日（土）、当館が代表を務める人間文化研究機構在外日本関係資料の調査・活用に関するパチカン班（代表 大友一雄）は、大分県教育委員会とともに大分県豊の国情報ライブラリーを会場に国際シンポジウムを開催しました（参加約250名）。

大分県知事広瀬勝貞氏の挨拶に続いて、第1部「マリオ・マレガ収集日本資料と国際交流」では、シルヴィオ・ヴィータ氏の進行のもとパチカン図書館のチェーザレ・パシーニ館長とアンヘラ・ヌーニェス＝ガイタン資料修復室長、当館ロバート キャンベル館長から、マレガ神父や収集されたキリシタン関係史料の保存修復について報告があり、パシーニ館長からは、「今回の資料発見が新しい文化交流の架け橋として未来の平和につなげていければ」との期待が寄せられました。

また、第2部「マレガ収集キリシタン関係文書の魅力と新発見」では、佐藤晃洋氏が「禁教初期における臼杵藩のキリシタン対策」について、三野行徳氏が「臼杵藩宗門奉行と類族制度」について最新の研究成果を報告、その後、大橋幸泰氏の司会進行で平井義人氏が臼杵藩領における転びキリシタンの分布と特徴について、大津祐司氏が寛永12年の南蛮誓詞とキリシタン統制について、大友一雄が臼杵藩宗門方の機能分析の可能性についてそれぞれコメントを行い、登壇者全員による討論が行われました。今後、画像データベースの公開、マレガ資料に含まれるマレガ神父のイタリア語資料との併用によって一層国際的なものになることなど、プロジェクトの展望が示され、会場からも期待が寄せられました。（大友 一雄）



地域シンポジウム「請戸の歴史と文化を知る会」

2019年10月27日、浪江町役場において、浪江町請戸区および人間文化研究機構広領域型基幹研究プロジェクト国文学研究資料館ユニット「人命環境アーカイブズの過去・現在・未来に関する双方向的研究」共同主催の地域シンポジウム「請戸の歴史と文化を知る会」を開催しました。これは同ユニットが昨年度開催しましたシンポジウム「福島県浜通りの歴史と文化の継承 ―『大字誌ふるさと請戸』という方法―」（2018年10月13日）の第二弾です。

東日本大震災の津浪による被害のため、浪江町請戸区は全戸全壊・流失した地域です。現在は防災集団移転促進事業のために、もともとの街並みは春夏秋冬の植物が叢生するか、巨大防潮堤で延々と続いています。前回・今回のシンポジウムはその請戸の歴史と文化を救出し、次世代へ継承するため、同ユニットでの調査・研究の成果を地域に還元するために開催されたものです。

請戸区長挨拶、趣旨説明を経て、以下3本の報告が行われました。

第1報告松下正和（神戸大学特命准教授）「苕野神社の縁起と歴史」。請戸の人びとの鎮守であり、式内社にも比定される苕野神社の歴史について、特に古代の東北地方の状況の中で報告しました。第2報告泉田邦彦（石巻市教育委員会主事）「請戸の歴史的景観について」。震災後に発見された太平山寺院跡・城跡などをはじめとして、地元の人びともあまり知られていない小字名などの分析など、地域の景観を復元する試みを行いました。第3報告天野真志（国立歴史民俗博物館特任准教授）「請戸区会議録の現在 ―修理過程から見てきた地域の歴史―」。津浪被害に遭いつつも救出された請戸区会議録などの保存処置・修復を東北大学災害科学国際研究所で進めています。その作業過程で分かった近代請戸の生活を報告しました。

浪江町はいまだに帰還困難区域を抱え、住民の帰還が進められている途中であるにも関わらず、当日は89名の参加者があり、地域の歴史への関心の高さがうかがわれました。（西村 慎太郎）



太平山霊園よりの請戸の眺望

第43回国際日本文学研究集会 参加記

第43回国際日本文学研究集会は、秋晴れそのものの心地よく晴れ渡った2019年11月16日(土)・17日(日)の2日間に亘って開催されました。今回の研究集会は、研究発表9本、ショートセッション5本、ポスターセッション4本、そして、ゲイ ローリー氏(早稲田大学法文学術院教授)による特別講演というラインナップで行われました。

はじめにロバート キャンベル館長が挨拶の中で、国際日本文学研究集会の意義やこれからの展望についてお話されました。この研究集会が日本文学研究を軸として国・時代・研究手法を横断するものとして40年来続いてきたのは、国文学研究資料館が大学や他の類似の研究機関と異なる日本文学研究の研究機関として、一つの領域・手法に閉じこもることなくその役割を果たしてきたが故であり、そこには先達の並々ならぬ努力があったろうと思います。



また、館長のお話の中では、国際コンソーシアムの構想が示唆され、本研究集会のような取り組みが更に展開し、国文学研究資料館が日本国内だけではなく世界における日本文学研究の中核を担う存在に発展していくことが期待できると感じました。

研究発表・ショートセッション・ポスターセッションでは、国内外で日本文学を研究している研究者が参加し、研究者相互の国際交流を図ることを目的とした国際研究集会に相応しく活発な議論が交わされました。ここでは個々の発表やセッションの中身について取り上げることはしませんが、文学理論を援用した研究や用例に基づいた研究、文献学的な研究など多彩な内容が展開され、非常に勉強になるものばかりでした。このようなさまざまな時代・研究手法・研究対象の研究に触れることができることは本研究集会の大きな意義と言えるでしょう。

また、今回、筆者は聴講だけではなく研究発表も行いましたが、発表者の立場に立つと本研究集会の意義がより実感できたように思います。筆者は香川県三豊市にある寺院に残された聖教から近世中期の僧侶がどのように修学していたのか、という趣旨の発表を行いました。この発表について、「聖教(しょうぎょう)」という言葉そのものや僧侶の修学という研究内容へのなじみのなさと同時に日本文学研究の対象としての寺院聖教の可能性や資料の先に広がる分野に触れることができたという感想を複数いただきました。加えて、複数の方から新たな視点や事例をご教示いただくこともできました。領域や手法に限定されずに研究者が一同に会する場であったからこそ、このような感想やご教示をいただくことができたと思います。聴講するだけではなく、発表者として参加することで刺激を与え合える場としてこの研究集会をより有意義に活用することができると感じました。

ゲイ ローリー氏の『松蔭日記』に関する特別講演は、「古典」を翻訳すること、テキストの書き手と読者、「教養」としての和文など非常に多くの示唆に富む内容だったと思います。特に『松蔭日記』が「書かなかった」表現を翻訳していく過程で、氏が「正親町町子が何故そのように表現したのか」という問いに向き合われたこと、資料に基づいて『松蔭日記』の受容のあり方を示されたことは、テキストを読み解く上での基礎的ながら非常に重要な研究であるように思われました。このような「翻訳」というテキストを越境させる営みの中で、テキストを掘り下げて定位していこうとする氏の研究とその成果は、資料に立脚しつつ「越境」する研究の一つのあり方であり、我々にとって学ぶべきところが大きかったと思います。

最後に、この国だけではなく世界的に人文学不要論・古典不要論が喧しい中であって、このような研究集会が開催されること自体が一定の意義を持つものだと考えます。無論、現状を維持するだけではなく、状況に応じて変化が求められることもあるのも事実です。しかし、聴講者としてまた発表者として参加して、この研究集会が専門に閉じこもることを余儀なくされ、さらにそれによって分断された「研究」が各個撃破されていく現状にささやかながらも抗する貴重な場であると感じました。そのような稀有な場であるこの研究集会が、国、時代、研究の交際させる場として今後も機能していくことを願ってやみません。

(大阪大谷大学・園田学園女子大学非常勤講師 / 園田学園女子大学社会連携推進センター学術研究員 柏原 康人)

大型寄託資料の紹介—石川透氏寄託資料と上野学園大学日本音楽史研究所寄託資料と—

(1) 石川透氏寄託資料

2017年度に、慶應義塾大学文学部教授石川透氏(1959-)の所蔵資料およそ3万冊が国文学研究資料館に寄託されました。石川先生は日本中世文学、特に奈良絵本・絵巻の研究者として世界的に高名ですが、また蔵書家・愛書家としてもよく知られています。そのご蔵書はまことに膨大で、屏風や絵入り本をはじめとくさぐさの写本・版本に及び、文学を中心に多領域にわたる書物を包摂しています。先生のご厚意により、すべての資料をデジタル化し国文研HP(DB)から順次公開していきます。ここに改めて、石川透先生につつしんで感謝と御礼を申し上げます。

(2) 上野学園大学日本音楽史研究所寄託資料

2019年7月26日(金)に、上野学園と国文研の間で、上野学園大学日本音楽史研究所所蔵古典籍類の国文研への寄託に関する「覚書」が締結されました。これに先立ち、既に2018年度から寄託は開始されており、2020年度中に完結する予定です。蔵書は、声明関係の写本や古刊本、近世の謡本、さらには久邇宮家旧蔵の楽器類まで、およそ690点に及びます(数値は2019年度寄託予定分まで)。古典籍はデジタル化し、国文研HP(DB)から順次公開していきます。なお2020年度からは、これらの資料への解題をメインとした特定研究「上野学園大学日本音楽史研究所寄託資料の基礎的研究」も開始されます。
(神作 研一)



『雀の夕顔絵巻貼付屏風』(部分)
(江戸前期)写、8曲1隻)



2019年7月26日(金)調印式
右が上野学園石橋香苗理事長

閲覧室だより

閲覧室に関わる動向を3点、紹介します。

【A】新たな開室日

2020年度より、これまで休室していた第2水曜日を開室します。また、これまで保存環境整備期間として休室していた、4～5月のゴールデンウィーク期間中の平日も開室します。

【B】新着図書・雑誌コーナーの設置

2019年7月より、閲覧室カウンター前に「新着図書・雑誌コーナー」を設置しました。新着の開架資料が届き次第、随時並べます。

【C】書庫ツアーの開始

2019年11月28日(木)に第1回の「書庫ツアー」を開催しました。所要45分程度。事前申込不要。参加者には、当館所蔵資料の画像を使用した「紙ブックカバー」と「うちわ」を用意しました。事前に国文研ツイッターで告知した上で、今後も折々に実施しますので、どうぞ気軽にご参加下さい。
(神作 研一)

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況

四川外国語大学日本語学部准教授 陳可冉氏による特別講義 『鶴林玉露』の流行と江戸前期文壇」入試説明会と同時開催

10月25日(金)、国文学研究資料館を会場に令和元年度特別講義を開催しました。この特別講義は、日本文学研究専攻所属学生の専門性を高めると同時に、広く深く教養と知識を身につけ先進的な日本文学研究を行う優秀な人材を育てていくことを目的として、日常の授業では触れられない角度からテーマを設定して開催しています。

今年度は、日本文学研究専攻修了生(平成24年3月修了)の陳可冉氏をお招きし、『鶴林玉露』の流行と江戸前期文壇』をテーマに講義を行いました。

講義では、近代前期に『鶴林玉露』が広まった背景や書かれた内容が日本の知識人に与えた影響などを貴重な原典資料の画像とともに解説。館内外から集まった参加者から活発な質疑があり、盛況のうちに終了しました。

陳可冉氏は、在学時から研究会や学会で積極的に発表を行うなど精力的な研究活動を重ね、2012年には「笹川科学研究奨励賞」(日本科学協会)を受賞、2013年には「第22回柿衛賞」を海外研究者として初めて受賞するなど、めざましい活躍をなされています。総研大学生にとっても学ぶべき点が多いことから、陳可冉氏には今後各地域で活動の中心を担うことが期待される海外在住の修了生として、SAA(SOKENDAI Alumni Ambassadorの略称)に就任いただくこととなり、委嘱状が伝達されました。

同時開催した入試説明会では大学院学生らが、日本文学研究専攻の概要や入試について熱心に耳を傾けていました。教員との相談会では現在の研究内容や今後の研究計画について詳細に話し合う姿が見られたほか、在学学生・修了生と学生生活や研究活動について和やかに歓談する場面もありました。

御伽草子を英語で紹介すると？英語で研究内容の紹介に挑戦 「日本を研究対象とする学生のための英語講習会」を開催

普段研究対象として慣れ親しんでいる文学作品や研究内容について英語で説明できますか。なかなかうまく表現できないということはありませんか。

7月から9月にかけて、国文学研究資料館で「日本を研究対象とする学生のための英語講習会」を開催しました。この講習会は、日頃英語から離れている学生に英語感覚を取り戻してもらい、自分自身の研究内容に関する英語表現を身につけてもらうことをねらいとしています。

講師として、翻訳・通訳者等として活躍し、日本文学の研究者でもあるファリア・アンナマリエ氏(Ph.D.)をお迎えし、アカデミック・ライティングの基礎や英語表現を学びました。学生、教職員延べ11名が参加し、御伽草子や古浄瑠璃、江戸時代の絵本の出版など、自身の研究内容を紹介する英文の作成に取り組みました。この講座は引き続き開催し、受講者は最終回講義でのプレゼンテーションを目指します。



特別講義を行う陳可冉氏



入試説明会で教員に研究計画などを相談する参加者

● 令和元年度イベントカレンダー（予定）

日付	イベント
1月14日（火）～3月31日（火）	通常展示「書物で見る 日本古典文学史」
1月14日（火）～3月31日（火）	特設コーナー「平安貴族は『伊勢物語』をどう読んだか」
1月31日（金）	「ぷらっとこくぶんけん」対談企画 一冊対談集 クリエーターと語るこの国の古典と現代 小倉ヒラク×ロバート キャンベル

大学支援「国文研でゼミを」 大学教員の皆様へ

国文学研究資料館のゼミ室で、豊富な所蔵資料を利用しながらゼミや講義を行うことができます。

※学部・大学院で行っている日本文学や日本史の授業が対象となります。

◆詳細は当館 WEB ページをご覧ください。

https://www.nijl.ac.jp/activity/education/semi/post_43.html

表紙絵資料紹介

『和漢名物茶入肩衝』 [元禄7年刊] 上下巻 縦10.6×横16.0cm

本書は、『茶器弁玉集』（寛文12（1672）年刊）を踏襲、加筆したもので、元禄7（1694）年に刊行された『万宝全書』（菊木嘉保編・13巻13冊）の巻6・7に収載された。『古今名物茶具秘蔵記』『和漢名物茶入之記』とも。

『万宝全書』は、日本や中国の画印・墨蹟や手鑑・諸道具の目録など多岐にわたる内容を備えた、江戸時代の美術や茶道具の百科事典。刊行されて以来版を重ね続けたため、現存数も多い。

肩衝とは、器の上方部（肩）が水平に張り出した形をしている茶入を指す。本書は、名器とされる茶入を形・寸法・釉薬の様子などがわかるように図解したり、その特徴や歴史などを説明する、いわゆる解説書である。茶の知識は日本に早くから伝わっていたが、いわゆる茶道が大成され、大衆化していくのが江戸時代にあたる。その過程で茶道に関する知識を欲する読者が広範に存在するようになり、本書のような解説書・入門書の類が多く刊行された。当館には茶道関連書も多く所蔵されているが、実用書として知識の流布に出版が重要な役割を果たしたことを物語っている。

ちなみに、掲載画像左頁に見える「初花」は、室町幕府8代将軍・足利義政が命名したとされ、天下三肩衝と呼ばれる有名な茶入のうちのひとつ。「信長公御所持」とあるように、永禄12（1569年）年頃には、織田信長が所持し、実際の茶会でも使用されたい。本能寺の変で流出後、徳川家康・豊臣秀吉など天下人の手を経て、最終的には元禄11年幕府に献上された。重要文化財指定されている現存する名器である。

（国文学研究資料館 鶉飼文庫 96-283-6～7 <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200019302/viewer/8>）

（宮本 祐規子）



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国文学研究資料館

〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3

Tel:050-5533-2910 Fax:042-526-8604

国文研ニュースNo.56

発行日 令和2年1月22日

編集 国文学研究資料館 企画広報室

製作 株式会社 アズディップ

©人間文化研究機構国文学研究資料館